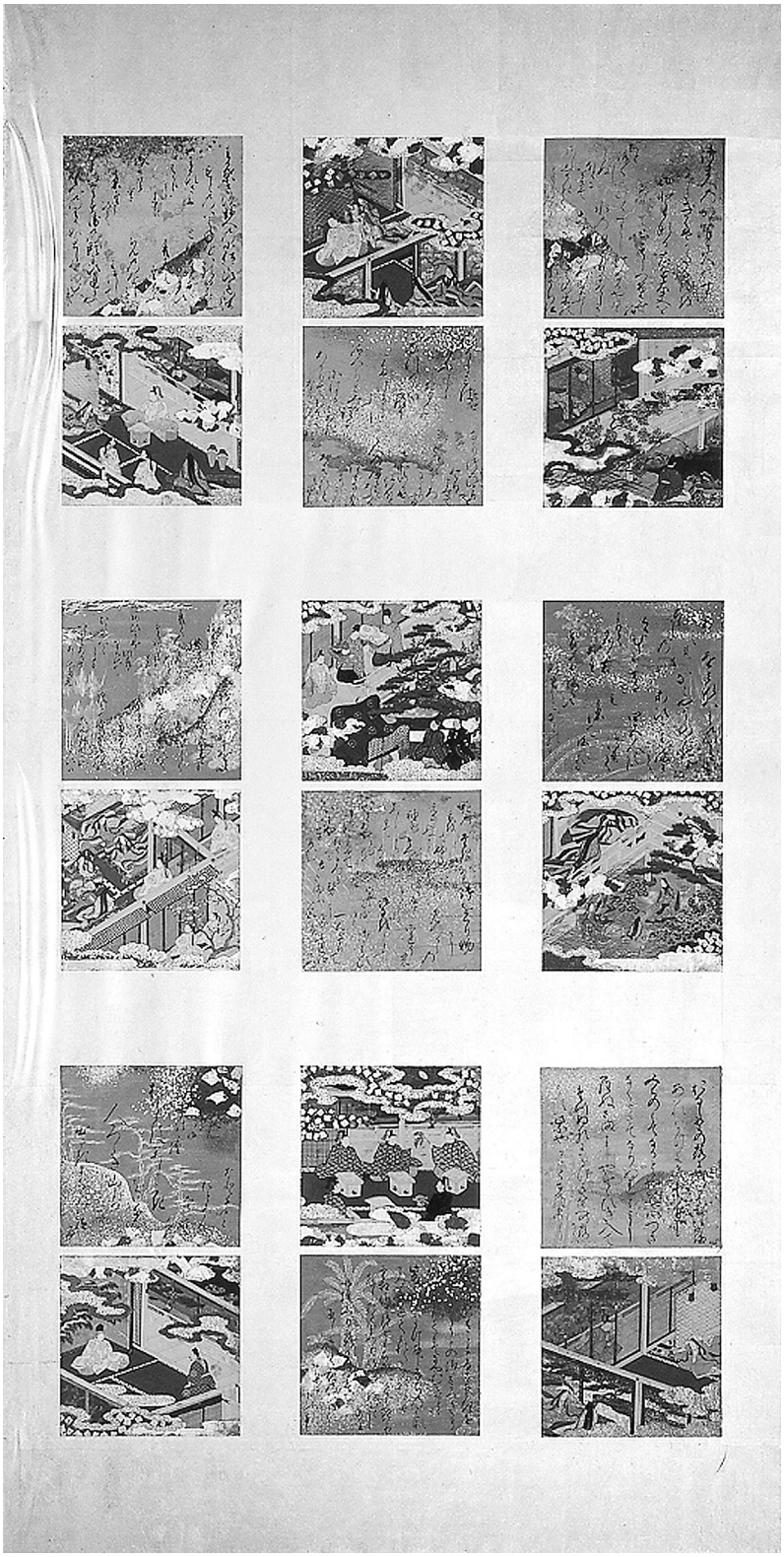
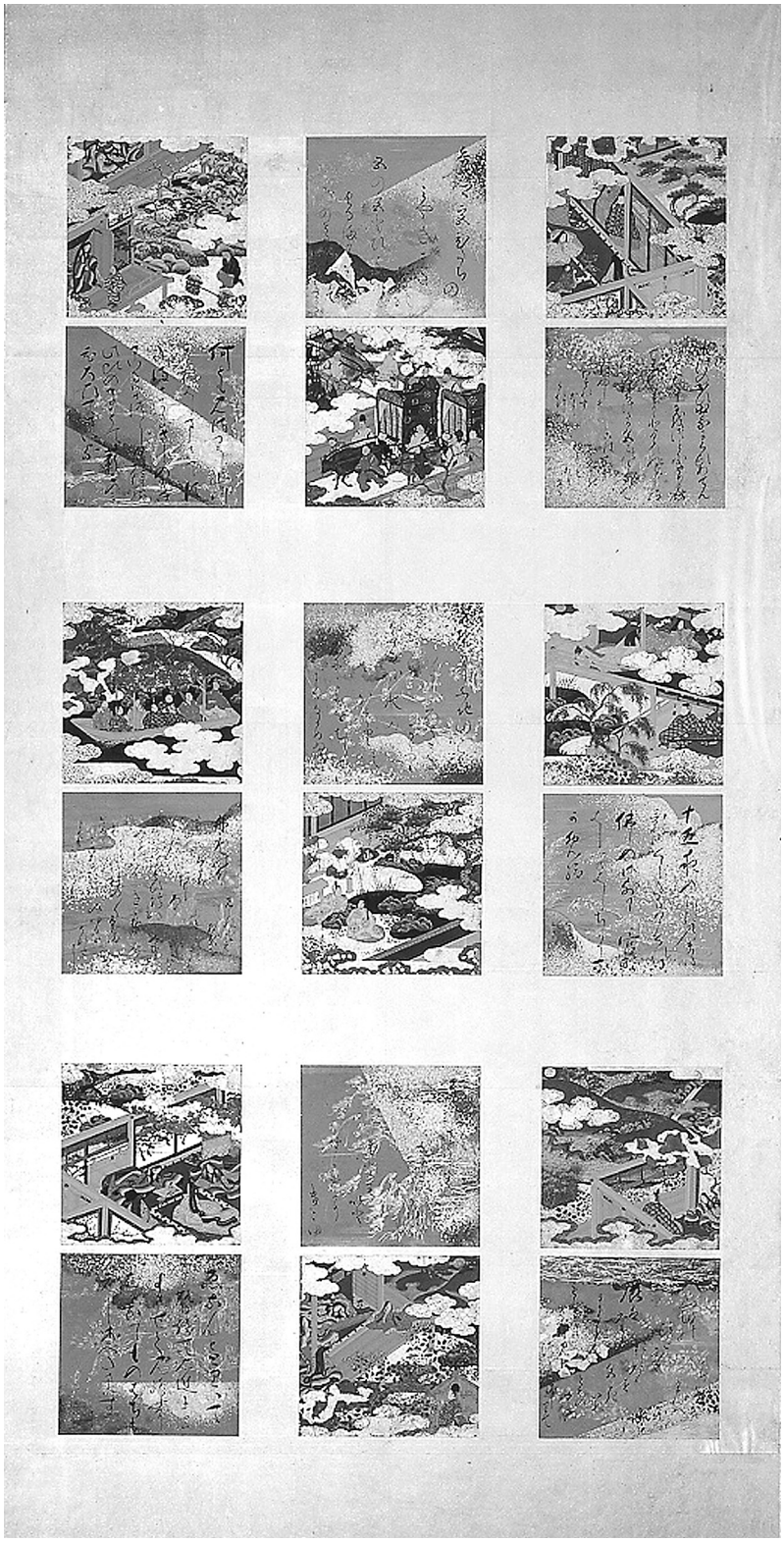


斎宮歴史博物館蔵　源氏物語図色紙貼交屏風
左隻　第一扇



斎宮歴史博物館蔵　源氏物語図色紙貼交屏風
左隻　第二扇

斎宮歴史博物館蔵
源氏物語図色紙貼交屏風について(下)

木　戸　久二子（日本文学）

はじめに

本稿では、右隻を取り上げた前編（「斎宮歴史博物館蔵源氏物語図色紙貼交屏風について（上）」）[1]に引き続き、左隻について論じる。

一　詞書

⑲篝火

御まへのかゝり火のす
こしきえかたなるを
御ともなる右近大夫を
めしてともしつけさせ給
いとすゝしけなるやり
水のほとりにけしき
ことにひろこりふし
たるまゆみの木の
したにうち松
おと
ろ〳〵
し
からぬ
ほとに
をきて
さししそきて
ともしたり

〔校異〕「さししそきて」河内本・保坂本―諸本「さししりそきて」
「ともしたり」―諸本「ともしたれは」

⑳野分

をみなへしのかさみ
なとやうのときに
あひたるさまにて
四五人はかり
つれて
こゝかしこの
くさむらに
よりて
色〳〵の
こともを
もちてさまよひ
なてしこなとのいと
あ　は　れ　け　な　る　え　た　と　も　と　り　も　て　ま　い　る

〔校異〕「四五人はかりつれて」三条西家本―諸本「四五人つれて」
「もちてさまよひ」横山本・池田本・高野辰之氏蔵本―諸本「もてさまよひ」

㉑藤袴

おなじ野の露にやつるゝ藤はかま
あはれはかけよかことはかりも
みちのはてなるとかやいと心つき
なくうたてなりぬれとみし

らぬさまにやをらひき入て
たつぬるにはるけき野への露ならは
うす紫やかことならまし

㉒真木柱
さうしみは
いみしく
おもひ
しつめて
らう
たけにより
ふし
給へりとみる
程に
にはかにおき
あかりておほき
なるこのした
なりつるひとりを
とりよせて
とのゝうしろ
によりて
さといかけ
給ほと
人のやゝみ
あふる
程もなく浅
ましきに
あきれて
ものし
給ふ

〔校異〕「程もなく」御物本・横山本・池田本・三条西家本―諸本「程もなう」

㉓梅枝
御をくり物
に
みつからの
御れうの
御なをしの
御よそひ
一くたりて
ふれ給
はぬ
たき物
ふたつほ
そへて
御くるまにたてまつらせたまふ
宮
花の香をえならぬ袖にうつしもて
ことあやまりといもやとかめむ
とあれは
いとくつしたりやとわらひ給
御車かくるほとにおひて
めつらしとふるさと人もまちそみむ
花のにしきをきてかへる君

㉔藤裏葉
花の色こくことにふさなかきを
おりてまらうとの御さかつきに
くはふとりもてなやむにおとゝ
紫にかことはかけむふちのはな
まつより過てうれたけれとも
宰相さか月をもちなからけしきはかり
拝したてまつり給へるさまいとよしあり
いくかへり露けき春を
過しきて花のひもとく
おりにあふらむ

㉕若菜上
わか菜さす野への小松をひきつれて
もとのいはねをいのるけふかな
とせめておとなひ
きこえたまふ
ちんのをしきよつして
御わかなさまはかりまいれり
御かはらけとりたまひて
こまつはらすゑの齢にひかれてや
野へのわかなもとしをつむへき

㉖若菜下
女御の御つまをとは
いとらうたけに
なつかしく
母君の御けはひく
はゝりてゆの
ねふかくいみしく
すみてきこえつるを
この御てつかひは
又さまかはりてゆんらかに
おもしろく
きく人たゝならす
すゝろはしたきまて
あひきやうつき
りんのて
なとすへて
さらに
いとかとある御ことの音也
〔校異〕「ゆんらかに」―諸本「ゆるゝかに」

㉗柏木
おとゝはかしこき
をこなひ
人かつらき山よりさうし
出たるまちうけ給て
かちまいらせんとし給
御す法と経
なともいとおとろ〳〵
しうさはきたり
〔校異〕「おとゝは」榊原家本・陽明家本・肖柏本・三条西家本―諸本「おとゝ」

㉘横笛
御はのおひ出るにくひあてん
とてたかうなをつとにきりもち

てしつくもよゝとくひぬらし給
へはいとねちけたる色このみかなとて
うきふしもわすれすなからくれ竹の
こはすてかたき物にそありける

㉙鈴虫
十五夜の月のまた
影かくしたる夕くれに
佛の御前に宮お
はしてはしちかうな
かめ給
〔校異〕「月のまた影かくしたる」西下経一氏蔵本・肖柏本・河内本・保坂本―諸本ナシ

㉚夕霧
鹿はたゝ
まかきのもとにたゝすみつゝ
山田のひたにも
おとろかす
色こきいねともの中にましりて
うちなくもうれへかほなり

㉛匂宮
兵部卿宮ひたちの
みやきさき
はらの
五の宮とひとつ
くるまにまねき
のせたてまつりて
まかてたまふ

㉜竹河
五葉にふちのいと
おもしろくさき
かゝり
たるを水の
ほとりの
石にこけをむしろ
にてなかめゐ給へり

㉝橋姫
そのことゝも
きゝわかぬも
のゝ音ともいと
すこけに
きこゆ
〔校異〕「きゝわかぬ」横山本・保坂本―諸本「きゝわかれぬ」

㉞椎本
何とも見さりし山かつ
もおはしまさて後
たまさかにさしのそき
まいるはめつらしくおほし給
此比の事とて薪このみ
ひろひてまいる
〔校異〕「おほし」―諸本「おもほえ」

㉟総角

舟にてのほり
くたり
おもしろう
あそひ給も
きこゆ
ほの〳〵有さま
みゆるを
そなたに
たち出て
わかき人〳〵
みたてまつる
さうしみの
御ありさまは
それと
見えねとも
紅葉を
ふきたる舟のかさりにしきとみゆるに
聲〳〵
ふき出るもの、おとゝも風につきておとろ〳〵しきまてきこゆ

〔校異〕「見えね」陽明家本・三条西家本―諸本「みわかね」
「かさりにしき」三条西家本・横山本・平瀬本―諸本「かさりのにしき」
「おとゝも」―諸本「ねとも」
「つきて」御物本・池田本・肖柏本・三条西家本―諸本「つけて」
「きこゆ」平瀬本・陽明家本・御物本―諸本「おほゆ」

㊱東屋

ゑなんととりいて
させ給て右近にことは
よませて見給ふに
むかひてものはちも
えしあへたまはす

〔校異〕「させ給て」―諸本「させて」

二　絵

⑲篝火

源氏、和琴を枕に玉鬘に添い臥しながら、庭の篝火を見る。庭の檀の木の横に、篝火の番をする右近大夫が座っている。

源氏と玉鬘の位置、和琴の向きは久保惣本(2)と一致する。

⑳野分

野分の翌朝、秋草の乱れ咲く秋好中宮の御殿。女童三人が庭に下りて虫籠に露を含ませている。左側の女童は手になでしこの花を持つ。その様子を簀子縁から眺める中宮の前に、夕霧の来訪を告げる女房が座る。

久保惣本では女房が二人だが、斎宮本・京博本(3)は一人。女房の様子や女童の位置は久保惣本に、簀子縁による場面の切り方や右端の女童の姿態は京博本に近い。

㉑藤袴

夕霧が源氏の使いとして玉鬘を訪ね、藤袴の花を御簾の下から差し入れ歌を詠む様子を室内側から描く。夕霧・玉鬘とも祖母大宮の喪に服しているため、鈍色の喪服を着用している。画面左下に、別室で控える女房二人。

京博本は同じ場面を外の夕霧側から描き、左下には女房の代わりに車と供人が控える。久保惣本はその直前、夕霧が御簾の前、花を手に

簀子縁に立つ。

㉒真木柱

玉鬘のもとに通おうとする髭黒に北の方、立ち上がって火取の灰を浴びせかける。画面右下に女房三人。

久保惣本・京博本とも北の方は火取を手に持ってはいるものの立ってはおらず、灰を浴びせかける直前の絵である。斎宮本はその決定的瞬間を描いて、こぼれかかる灰、顔をそむける髭黒の様子も見える。

㉓梅枝

薫物合わせの翌早朝、源氏、帰る蛍兵部卿宮に直衣と薫物を贈る。画面は車に乗ろうとする蛍宮と、その後ろで贈り物の薫物二壺と直衣装束を持つ男二人。庭に松と満開の紅梅、八葉の車と従者二人。車の位置等は久保惣本と同じだが、従者が久保惣本四名、京博本は三名。

㉔藤裏葉

内大臣、藤花の宴に夕霧を招き、盃に藤の花を添えて雲居雁を許す歌を詠む。中央が夕霧、画面向かって右で藤の花を持つのが柏木、左が弁少将、左手前の横顔が内大臣、右手前で銚子を持つのは従者。

㉕若菜上

源氏の四十の賀。玉鬘は源氏に若菜を奉った。手前に玉鬘の男児二人と女房一人。本文では男児は振り分け髪とあるが、異なっている。

久保惣本（若菜一）は女房が三人で、子どもは振り分け髪であり、玉鬘と子どもの前にも折敷が置かれている。

㉖若菜下

六条院の女楽。久保惣本（若菜三）と同じ。画面中央に源氏、時計回りに、後ろ姿・琵琶の明石の君、脇息にもたれる明石中宮、琴の女三宮、和琴の紫の上。簀子縁に夕霧と男児二人。男児は玉鬘の長男と夕霧の長男。

㉗柏木

柏木の病気平癒のため、父の致仕大臣、修験者たちを招く。斎宮本と京博本は山伏と対座している。久保惣本では聖と対座し、山伏たちは隣室に控えている。

㉘横笛

幼い薫が笛を口に入れたり投げ出したりするのを、源氏笑ってたしなめる。御簾を開いて立つ源氏、尼剃ぎ姿の女三宮、薫、女房一人。

㉙鈴虫

十五夜の夕暮れ、女三宮を訪れた源氏、琴を弾きつつ空を見上げる。詞書では源氏はまだ登場していない。

㉚夕霧

夕霧、小野の山荘を再訪、垣近くの稲田の中で鹿が鳴く。この場面では京博本のように、扇を持つ夕霧を描くのが通例だが、久保惣本（夕霧一）・斎宮本では扇を持たない。

㉛匂宮

夕霧の催す賭弓の還饗に、匂宮・薫ら車を連ね、六条院へと向かう。

㉜竹河

晩春の夕、冷泉院の庭で松にかかる藤を、薫と藤侍従が石の苔を敷物代わりにして眺める。久保惣本（竹河二）と同じ。

㉝橋姫

宇治の中の君、月を琵琶の撥で招き、大君、箏の琴を弾く。簀子縁に童と女房。垣間見する薫。詞書では薫は到着したばかりで、まだ垣間見はしていない。

久保惣本（橋姫一）・京博本は国宝『源氏物語絵巻』と同じで大君左・中の君右だが、斎宮本では二人の位置が逆。

㉞椎本

宇治の姫君たちのもとに山の阿闍梨より炭などが届けられる。童に手紙を渡す女房。画面奥の室内に大君・中の君の姿が見える。

㉟総角

十月、薫・匂宮ら宇治川に舟を浮かべ紅葉狩りをする。

久保惣本（総角二）は舟二隻だが、斎宮本は一隻。

㊱東屋

中の君、物語の絵を出して浮舟に見せ、右近に詞を読ませる。画面中央に浮舟、向かい合って中の君が座り、右近と女房一人が左右に控える。詞書では右近が物語本文を音読していることになるが、絵にはない。

久保惣本・京博本ともにこの場面はないが、国宝『源氏物語絵巻』でよく知られた場面である。

三

斎宮本と久保惣本・京博本の絵と詞書の一致・不一致を表にしてみる。

注意すべきは、描く場面が一致していたとしても、細部まで完全に一致するような例はまず見られない、ということである。

	巻	絵 久	絵 京	詞書 久	詞書 京
	篝火	◎	◎	×	×
	野分	◎	◎	○	○
	藤袴	○	◎	◎	×
	真木柱	◎	◎	○	○
	梅枝	◎	◎	○	○
	藤裏葉	◎	◎	○	○
	若菜上	◎	×	○	×
	若菜下	◎	×	×	×
	柏木	◎	◎	×	×
	横笛	◎	◎	○	○
	鈴虫	◎	×	×	×
	夕霧	○	○	×	×
	匂宮	◎	◎	×	○
	竹河	◎	◎	○	○
	橋姫	◎	◎	×	×
	椎本	×	◎	×	×
	総角	◎	×	◎	×
	東屋	×	欠	×	欠

注

(1)「斎宮歴史博物館蔵源氏物語図色紙貼交屏風について（上）」（『東海学院大学短期大学部紀要』第三十六号、平成二十二年三月）。

(2)『和泉市久保惣記念美術館源氏物語手鑑研究』平成四年、和泉市久保惣記念美術館。

(3)『京都国立博物館所蔵源氏物語画帖』平成九年、勉誠社。